

# 手袋を買いに

新美南吉



寒い冬が北方から、狐の親子の棲んでいる森へもやって来ました。

あるあさほらあな  
或朝洞穴から子供の狐が出ようとしてしましたが、

「あつ」と叫んで眼を抑えながら母さん狐のところへころげて来ました。

「母ちゃん、眼に何か刺さった、ぬいて頂戴早く早く」と言いました。

母さん狐がびっくりして、あわてふためきながら、眼を抑えている子供の手を恐る恐るとりのけて見ましたが、何も刺さってはいませんでした。母さん狐は洞穴の入口から外へ出て始めてわけが解りました。昨夜のうちに、真白な雪がどつきり降つたのです。その雪の上からお陽さまがキラキラと照していたので、雪は眩しいほど反射していたのです。雪を知らなかった子

供の狐は、あまり強い反射をうけたので、眼に何か刺さったと思つたのでした。

子供の狐は遊びに行きました。真綿まわたのように柔らかい雪の上を駈かけ廻まわると、雪の粉こが、しぶきのように飛び散つて小さい虹にじがすつと映るのでした。

すると突然、うしろで、

「どたどた、ざーっ」と物凄ものすじい音がして、パン粉こなゆきのような粉雪こなゆきが、ふわーつと子狐におつかぶさつて来ました。子狐はびつくりして、雪の中にころがるようにして十米メートルも向こうへ逃げました。何だろうと思つてふり返つて見ましたが何もいませんでした。それは樅もみの枝から雪がなだれ落ちたのでした。まだ枝と枝の間から白い絹糸のように雪がこぼれていました。

間もなく洞穴へ帰つて来た子狐は、

「お母ちゃん、お手々が冷たい、お手々がちんちんする」と言つて、濡ぬれて牡丹色ぼたんいろになつた両手を母さん狐の前にさしだしました。母さん狐は、その手に、は——つと息をふっかけて、ぬくとい母さんの手でやんわり包んでやりながら、

「もうすぐ暖あたたかくなるよ、雪をさわると、すぐ暖くなるもんだよ」といいましたが、かあいい坊やの手に霜しも焼やけができてはかわいそうだから、夜になつたら、町まで行つて、坊ぼうやのお手々にあうような毛糸の手袋を買つてやろうと思ひました。

暗い暗い夜が風呂敷ふろしきのような影をひろげて野原や森を包みにやつて来ましたが、雪はあまり白いので、包んでも包んでも白く浮びあがっていました。

親子の銀狐は洞穴から出ました。子供の方はお母さんのお腹なかの下へはいりこんで、そこからまんまるな眼をぱちぱちさせな

がら、あつちやこつちを見ながら歩いて行きました。

やがて、行手ゆくてにぼつたりあかりが一つ見え始めました。それを子供の狐が見つけて、

「母ちゃん、お星さまは、あんな低いところにも落ちてるのねえ」とききました。

「あれはお星さまじゃないのよ」と言つて、その時母さん狐の足はすくんでしまいました。

「あれは町の灯ひなんだよ」

その町の灯を見た時、母さん狐は、ある時町へお友達と出かけて行つて、とんだめにあつたことを思出おもいだしました。およしなさいつていうのもきかないで、お友達の狐が、或ある家の家鴨あひるを盗もうとしたので、お百姓ひやくしやうに見つかつて、さんざ追いまくられて、命からがら逃げたことでした。

「母ちゃん何してんの、早く行こうよ」と子供の狐がお腹の下から言うのでしたが、母さん狐はどうしても足がすすまないのでした。そこで、しかたがないので、坊やぼうやだけを一人で町まで行かせることになりました。

「坊やお手々を片方お出し」とお母さん狐がいました。その手を、母さん狐はしばらく握っている間に、可愛い人間の子供の手にしてしまいました。坊やの狐はその手をひろげたり握ったり、つか抓って見たり、か嗅いで見たりしました。

「何だか変だな母ちゃん、これなあに？」と言って、雪あかりに、またその、人間の手に変えられてしまった自分の手をしげしげと見つめました。

「それは人間の手よ。いいかい坊や、町へ行ったらね、たくさん人間の家があるからね、まず表に円まるいシャツポの看板のかかつ

ている家を探さがすんだよ。それが見つかったらね、トントンと戸を叩たたいて、今晚はつて言うんだよ。そうするとね、中から人間が、すこうし戸をあけるからね、その戸の隙間すきまから、こつちの手、ほらこの人間の手をさし入れてね、この手にちようどいい手袋頂戴つて言うんだよ、わかったね、決して、こつちのお手々を出しちや駄目だめよ」と母さん狐は言いきかせました。

「どうして？」と坊やの狐はききかえました。

「人間はね、相手が狐だと解ると、手袋を売つてくれないんだよ、それどころか、掴つかまえて檻おりの中へ入れちゃうんだよ、人間つてほんとに恐こわいものなんだよ」

「ふーん」

「決して、こつちの手を出しちやいけないよ、こつちの方、ほら人間の手の方をさしだすんだよ」と言つて、母さんの狐は、持つ



て来た二つの白銅貨はくどうかを、人間の手の方へ握らせてやりました。

子供の狐は、町の灯ひを目あてに、雪あかりの野原をよちよちやつて行きました。始めのうちは一つきりだった灯が二つになり三つになり、はては十にもふえました。狐の子供はそれを見て、灯には、星と同じように、赤いのや黄いのや青いのがあるんだなと思いました。やがて町にはいりましたが通りの家々はもうみんな戸を閉しめてしまつて、高い窓から暖かそうな光が、道の雪の上に落ちてゐるばかりでした。

けれど表の看板の上には大てい小さな電燈がともつていましたので、狐の子は、それを見ながら、帽子屋を探して行きました。自転車の看板や、眼鏡めがねの看板やその他いろんな看板が、あるものは、新しいペンキで画かかれ、或あるものは、古い壁のようにはげていましたが、町に始めて出て来た子狐にはそれらのも

のがいったい何であるか分らないのでした。

とうとう帽子屋がみつかりました。お母さんが道々よく教えてくれた、黒い大きなシルクハットの帽子の看板が、青い電燈てらに照てらされてかかっています。

子狐は教えられた通り、トントンと戸を叩きました。

「今晚は」

すると、中では何かことごと音がしていました。音がやがて、戸が一寸ほどゴロリとあいて、光の帯が道の白い雪の上に長く伸びました。

子狐はその光がまばゆかったので、めんくらって、まちがった方の手を、——お母さまが出しちやいけないと言ってよく聞かせた方の手をすきまからさしこんでしまいました。

「このお手々にちようどいい手袋下さい」

すると帽子屋さん、おやおやと思いました。狐の手です。狐の手が手袋をくれと言うのです。これはきつと木の葉こはで買いに来たんだなと思いました。そこで、

「先にお金を下さい」と言いました。子狐はすなおに、握つて来た白銅貨を二つ帽子屋さんに渡しました。帽子屋さんはそれを人差指ひとさしゆびのさきにつけて、カチ合せて見ると、チンチンとよい音がしましたので、これは木の葉じゃない、ほんとお金だと思いましたので、棚たなから子供用の毛糸の手袋をとり出して来て子狐の手に持たせてやりました。子狐は、お礼を言つてまた、もと来た道を帰り始めました。

「お母さんは、人間は恐ろしいものだって仰有おっしゃったがちつとも恐ろしくないや。だって僕の手を見てもどうもしなかつたものか」と思いました。けれど子狐はいつたい人間なんてどんなものか

見たいと思いました。

ある窓の下を通りかかると、人間の声が出ていました。何と  
いうやさしい、何という美しい、何と言うおっとりした声なん  
でしょう。

「ねむれ　ねむれ

母の胸に、

ねむれ　ねむれ

母の手に——」

子狐はその唄声うたごえは、きつと人間のお母さんの声にちがいない  
と思いました。だって、子狐が眠る時にも、やつぱり母さん狐  
は、あんなやさしい声でゆすぶってくれるからです。

するとこんどは、子供の声がありました。

「母ちゃん、こんな寒い夜は、森の子狐は寒い寒いって啼ないて

るでしようね」

すると母さんの声が、

「森の子狐もお母さん狐のお唄をきいて、ほらあな洞穴の中で眠ろうと  
しているでしようね。さあ坊やも早くねんねしなさい。森の子  
狐と坊やとどつちが早くねんねするか、きつと坊やの方が早く  
ねんねしますよ」

それをきくと子狐は急にお母さんが恋しくなつて、お母さん  
狐の待つている方へ跳とんで行きました。

お母さん狐は、心配しながら、坊やの狐の帰つて来るのを、今  
か今かとふるえながら待つていましたので、坊やが来ると、あたたか暖  
い胸に抱きしめて泣きたいほどよろこびました。

二匹の狐は森の方へ帰つて行きました。月が出たので、狐の  
毛なみが銀色に光り、その足あとには、コバルトの影がたまり

ました。

「母ちゃん、人間ってちつとも恐こわかないや」

「どうして？」

「坊、間違えてほんとうのお手々出しちやったの。でも帽子屋さん、掴つかまえやしなかつたもの。ちゃんとこんない暖い手袋くれたもの」

と言つて手袋のはまった両手をパンパンやつて見せました。お母さん狐は、

「まあ！」とあきれましたが、「ほんとうに人間はいいものかしら。ほんとうに人間はいいものかしら」とつぶやきました。

手袋を買いに

底本：「新美南吉童話集」岩波文庫、岩波書店  
1996（平成 8）年 7 月 16 日第 1 刷発行  
1997（平成 9）年 7 月 15 日第 2 刷発行

入力：大野晋

校正：伊藤祥

1999 年 3 月 2 日公開

2003 年 10 月 3 日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫  
(<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作  
にあたったのは、ボランティアの皆さんです。